

# 伝達される Witz

佐藤 裕子

## 0. はじめに

「現代の産業社会においてWitzは至る所に存在し、もっとも重要かつ盛んに話されている民話のジャンルである<sup>1)</sup>」

約20年前にルッツ・レーリッヒ (Lutz Röhrich) が上で指摘しているように、産業革命に匹敵すると言われるここ数年来のコンピューターによるメディア革命が進行している現在もなお、Witzは「語り伝えられる」というその本来の形態をもっとも忠実に保持していると言えるであろう。メルヒェンが今日、その殆どが印刷された形で読まれ、あるいは映像化されて伝達されるのに対しWitzの場合は、様々なWitz集が繰り返し出版され、テレビ、雑誌などのメディアを介して語られたりはその神髄は依然として直接口頭で語り伝えられることにあり、実際大多数のWitzが即興の名もない語り手によって日常生活の場で語り伝えられていく。またドイツの例を取ってみると、東フリースラント人Witz (Ostfriesenwitz)、マンタWitz<sup>2)</sup> (Mantawitz)、東ドイツ人—西ドイツ人Witz (Ossi-Wessiwitz)、ブロンディWitz (Blondinenwitz) など、その時々々の社会の置かれた状況を微妙に反映しながら全国的な流行が生まれては消えていくという点で、Witzはまさに「生きた」存在であり、社会現象、そして文化現象であるといえる。

いわゆる人間が言葉を使ってコミュニケーションをとる生物である限り、Witzやあるいはそれに類似した形態の笑い話を持たない文化は、古今東西存在しないであろう。現在、インターネットをはじめとする新しいメディアの発達により地球上にひとつの大きな文化圏が誕生し、それによって仲介されるWitzも国や文化を超えた共通した流行が見られるようになったが、それぞれの社会や文化、時代により笑いのオチ (Pointe)

やWitzが語り伝えられる機会や場が異なるのも事実である。例えば1900年の初めの風刺雑誌『空飛ぶ草紙』(Fliegende Blätter)に満載されている滑稽な絵や文の多くは現代の我々の笑いの感覚とは離れたものであり、当時のこの雑誌の笑いを追体験することは殆ど不可能である。また、ジョークの語られる場について述べれば、本稿が研究対象とするドイツ語文化圏を初め、多くの文化圏で、年齢や性別、卓越したWitzの語り手であるか否かに関わらず、誰もが例外なくWitzのひとつやふたつを知っており、リラックスした友人同士の酒席などでそのWitzが披露される。一方日本では同様の席では友人、知人、あるいは「有名人」の噂話や滑稽な逸話は披露されるが、いわゆるオチのついた滑稽な話はむしろ舞台の上でプロの漫才師や落語家の語りの中に散りばめられて存在する。観客はあくまで聞き手にとどまり、いわゆる「娯楽作品」としてのWitzを楽しむのである。Witzは「なぞなぞ」や「ギャグ」、「駄洒落」の形をとって、子供や学生の間で語られ伝承されていく場合が多い。

いずれにせよメルヒェンが早くからひとつのジャンルとし成立し、文学や民俗学、社会学、心理学の分野で様々な角度から分析、解釈がなされているのに対し、Witz研究は19世紀の後半から長く心理学的な分析の枠の中にとどまってきた傾向がある。Witzをひとつの社会現象、文化現象としてとらえる見解は比較的最近のものであり、包括的なWitz研究の必要性を指摘する声は多い<sup>3</sup>。

笑いや滑稽なものに関する研究は「真面目なもの」「道徳的なもの」「悲劇的なもの」の研究に比べ、なおざりにされてきただろうと考えがちであるが、いわゆるもっとも古典的な学問分野の一つである哲学の分野で、古代ではプラトンやアリストテレスが笑いを道徳や善と対立するものの危険なものとして位置づけて論じ、18、19世紀にはメンデルスゾーン、カント、ジャン・パウルもまた笑いの理論を展開している。20世紀の初頭にはベルクソンが『笑い』を出版している。Witzに関する研究の古典的なものとしては心理学の分野でフロイトの „Der Witz und seine Beziehung zum Unbewussten“ (日本語訳は『機知—その無意識との関係』フロイト著作集 第4巻 237-421ページ)があるが、民俗学の分野ではWitzはメルヒェン同様、滑稽話 (Schwank) と並んで民話

(Volkserzählung) のひとつのジャンルとして成立している。民俗学で研究対象とされるのは、「超個人的 (überindividuell) で典型的、かつ集団の中で伝承される口承文芸」であるが、この条件の下では、作者や著作権がなく口頭で伝達され、そのネタ (Stoff) が古くは中世や古代にまで遡ることができ、それが繰り返し現れる Witz もまたフォークロアとされる<sup>4</sup>。民俗学ではレーリッヒ (Lutz Röhrich) がその定義から、形式、機能にわたった総体的な解説書 „Der Witz“ を著している。このように Witz を論じることは、複数の学問分野でなされている研究を助けに進めていく作業である。本稿では、Witz の持つコミュニケーションの手段としての機能に注目し、Witz が語られるとき、集団の中でどのようなことが起こるのか、また Witz は社会の中でどのような機能を果たしているのかを解明する手がかりとしたいが、まず日本で比較的介绍されることの少ない Witz の概念、定義から進めていきたい。

## 1. Witz の語源

Witz の語源は理性や知識、知力を意味する古高ドイツ語 Wizzi に由来する。中高ドイツ語 Witze も古高ドイツ語と同様に理性や精神力を意味し、精神的な活動を表す言葉として用いられて、Verstand (理性) や Klugheit, Weisheit (賢さ) と同義で使用されていた<sup>5</sup>。この意味は現代ドイツ語でも Mutterwitz (生まれつきの才知) や Er hat Witz. (あの人は才知豊かな人間だ。) などの慣用的言い回しに残っている。これが17世紀になるとフランス語の esprit や英語の wit の影響を受け、明敏な連想能力、物事の相関関係を素早く認識する能力や工夫に富んだ巧みな発想などを指すようになる。17世紀の終わりから18世紀の前半にかけて、Witz という言葉は広く使われ始めるが、文学的才能や発想の能力、物事の隠れた相関性を洞察し、的確で斬新な言葉で表現する能力を指すようになる。18世紀中期には Witz は主に文学的才能、つまり文学的な発想能力という意味で使用されるが、「工夫を凝らした発想」や「周到な言葉や考え」に文学の本質が存在するとされていた当時、明敏な連想能力や、巧みな発想を意味していた Witz という言葉が文学の概念として取り入れられるのは、自然な変容であった<sup>6</sup>。

Witz に滑稽さや戯れの要素が加わるのは19世紀になってからのことである。Witz は巧みな発想力を意味するが、その発想の能力は滑稽さや冷やかしといった意味に限定され、つまり機知を指すようになるが、この頃、従来の意味の連続線上にある、明敏に反応しそれによって物事の意表をついた側面を照らし出す、いわゆる「機知」としての使用法と、笑わせることを目的とした短い語りの形式、つまり笑い話や現代のジョークとしての使用法が併用されていたようである。19世紀に短い笑い話としてのWitzが広まり定着していった背景には大衆雑誌の果たした役割を見過ごすことはできない。18世紀の後半から19世紀前半にかけてナポレオンによる支配、フランス革命などの影響を受けて高まった政治意識は風刺雑誌（Witzblätter）の形をとって表れてくる。そのような風刺雑誌の中ではウィーンで『ひょうきんもの』 „Der Spassvogel“（1778年）、ライプツィヒで『道化年報』 „Narrenalmanach“（1847年～1849年）が、また1848年以降の検閲制度の緩和もあり1849年からその後100年にわたってミュンヘンで発行された『空飛ぶ草紙』 „Fliegende Blätter“や『デュッセルドルフ月刊』 „Düsseldorfer Monatshefte“などがドイツ語圏の定期刊行物として人々に広く講読されるようになる。これらの雑誌には当時の著名人の姿のカリカチュアと並んで数行からなる笑い話、つまりWitzが掲載されていた<sup>7</sup>。これらの風刺雑誌に掲載されたWitzの一例を紹介してみよう。

#### In der Rechenstunde

Lehrer : „Die Mutter brät ein großes Fleisch, fangen wir 'mal ein Stund. Sie teilt es nun in drei Stücke ; wieviel erhältst Du dann Karl?“  
 – „Ein dtittel“ – „Sie schneidet dann alle Stücke nochmals durch, was hast du dann?“ – „Zwei Sechstel“ – „Nun zerschneidet sie sie noch einmal?“ – „Vier Zwöftel“ – „Dann nochmaligen Teilen?“ – „Acht Vierundzwanzigstel“ – „Und wenn sie es alles noch einaml schneidet?“  
 – Den Lehrer triumphierend ansehend : „Na das ist halt dann Gulasch“<sup>8</sup>

(Fliegende Blätter)

### 算数の時間に

教師「お母さんが大きな肉の塊を焼くとする。ちょっと勉強をしてみよう。お母さんはそれを3つに切り分けた。カール、君の取り分はいくらだね？」 「3分の1」「そしたら切り分けた肉全部をもう一回半分にすると、君の取り分はどれだけかな？」 「6分の2。」  
「そいつをもう一度切り分けると？」 「12分の4だよ。」  
「じゃあ、もう一回半分にすると？」 「24分の8。」  
「それじゃあ、それ全部をもう一回切り分けたら？」 カールは得意満面で先生の顔を見ながら答えた。「そしたら、もうグーラシュ（細切れ肉のシチュー）になっちゃうよ。」

この教師と子供の Witz はいささか冗漫な感じは免れないが、導入部、展開部、オチと現代の Witz が持つ構造を有している。

それでは今日 Witz はどのような意味で使用されているのだろうか。ドイツ語辞典によると Witz は、第一に Scherz（冗談、ひやかし、）の同義語として、オチのついた話（Äußerung mit besonderer Pointe）と定義されており、これはジョークともいわゆるウィットとも理解できる記述である。続いて古い言葉の使用法として「精神」や「機知に富んだ様子」、「理性」などが紹介されているが<sup>9</sup>、日常では Witz は第一に語られるもの、口頭で伝えられるものと一般的に理解されているようである。

ドイツ語の Witz について論じるときの困難な点は、この言葉の意味を正確に伝える日本語が存在しないということである。日本で出版されている独和辞典の一例をあげると、Witz の日本語訳として「1. 機知、ウィット、とんち、機転 2. 冗談、しゃれ、ジョーク、冗談話、小ばなし…<sup>10</sup>」などが記載されているが、英語の借用であるジョークという言葉をのぞいては、ここで取り扱う日常的に語られる短い笑い話としての Witz にあたるものは見つからない。

ジョークは冗談や軽口の類義語とされており、これらは共通して「周囲を楽しくさせたり、他人をからかったりするためにふざけて言う話」であるが、冗談が話のみならず、ふざけた行為をも意味するのに対し、ジョークは特に笑わせるために意図的に話される「小話」や「笑い話」

をも含めていう場合が多い。また軽口は「軽快な語調で滑稽 [こっけい] みのある言葉」を意味し、言語による表現に限定されるが、ジョークのように相手を笑わせるという意図性はない。従ってジョークの相手を笑わせるという意図があることと、「話」であるという二つの要素をもって類語とされる冗談や軽口とは意味を異にする。

そこで小ばなし（笑わせることを目的として語られるちょっとした短い話。短い落語、または落語のまくらに用いる江戸趣味の笑話など。一口ばなし、笑話）<sup>11</sup>という言葉が形式的には Witz にもっとも近いと思われるが、小ばなしが江戸時代に全盛期を経験して、現代では主に落語の舞台の上で披露され、いわゆる芸能という特別な分野で生存権を得ているのに対し、Witz の生存権は舞台、テレビの娯楽番組、インターネット、そして何よりも人々の日常生活の中にまで及び、文学の一つのジャンルとして成立しているながら、いまだなお人から人へと口頭で伝承されていく。他方、日本語の「洒落」、駄洒落や「ギャグ」は、今日インターネットで掲載されたり、テレビでタレントによって披露されたりして、その流行が Witz 同様、社会のおかれている状況や傾向を示唆する場合もあるが、導入部の語りの部分とオチで構成される Witz とはやはり異なるものである。

そこで可能性として Witz を包括的に「笑い話」と訳することが考えられるが、ここで再び考慮すべきことは、ドイツ語の Witz という言葉は英語のジョークのような短い笑い話とウィット、つまり機知（日本語の機知という言葉には短い笑い話という意味はない）という両方の意味を持っているということである。従って本稿では、ドイツ語の Witz という言葉を使用することにしたい。今日 Witz を英訳するときには、joke を使用するのが通常となっているようである。心理学者フロイトの Witz を論じた著作のタイトル „Der Witz und seine Beziehung zum Unbewussten“（日本語訳は『機知—その無意識との関係—』）の英語訳は „Wit and its relation to the Unconscious“ と „Jokes and their relation to the unconscious“ の両方が出版されているが、後者の方が主流となっているようである。一方、この著作の日本語訳では Witz には一貫して「機知」という日本語訳がなされている。フロイトの論文を読み進むと、確かに Witz が

機知と理解できる個所も、また機知とジョークの両方を意味していると考えられる箇所もある。しかしこの本は総体としてやはりジョーク論であろう。例えばフロイトはこの著作の中で Witz の特性を以下のように記している。

Ein neuer Witz wirkt fast wie ein Ergebnis von allgemeinsten Interesse ; er wird wie die neueste Siegesnachricht von dem einen dem anderen zugestragen.<sup>12</sup>

(新しい Witz は衆人の関心ごとのように作用する。最新の戦勝の知らせのごとく人から人へと伝えられるのである。)

ここで想定されているのは、やはり短い笑い話、つまりジョークと考えられる。機知は臨機応変に働く才知であり、才知には当然のことながら流行もなく、また才知は伝達されうるものでもない。この著作でフロイトは慣れ親しんだ幾つかのユダヤジョークを題材に分析、Witz の理論付けを試みているが、フロイトの Witz 理論においては伝達という要素が重要な位置をしめている。

## 2. 伝達される Witz

Witz の特性は語られること、つまり伝達と笑いにある。それでは Witz を成り立たせている二つの重要な要素である伝達と笑いに焦点を当てて Witz が語られるときに何が起こるのかということについて考察していきたい。

フロイトは前述の著書『機知と無意識の関係』の中で、Witz を語る動機として、快感 (Lustgewinn) の他に、自己の精神を表現する事への切なる欲求、伝達する事への欲求を指摘している。フロイトはここで Witz と単なる滑稽な話が語られる際の心理的プロセスを比較し、単に滑稽な話がそれを発見した人物の一人だけの楽しみであり得るのに対し、Witz の場合はそれを伝達する事への欲求が Witz を語る行為と分かちがたく存在すると定義づけている。Witz を思いついただけでは Witz を語るという作業 (Witzarbeit) の過程は完結することではなく、発案した Witz を伝達することにより初めて Witz を語るというプロセスが完結するのである。これは自分が思いついた Witz を笑うことができないという現象にも密接

に関連している。事実、人は自分が Witz を思いついた時点でほくそ笑むことはあっても、それが開放的な笑いにつながることはない。

ただ単に滑稽なことの場合、これに関与し作用するのは「自分」(Ich) 以外に「自分」が滑稽さを認める「目標人物」(Objektperson) の二人であって、ここでさらに第三の人物の存在は必ずしも必要ではない。ところが Witz は語り手である「自分」と、「目標人物」、そしてさらに報告される聞き手である「第三の人物」を必要とする。Witz がその役割を果たしたか、つまり功を奏したかどうかの判断はこの「第三の人物」に委ねられているのである<sup>13</sup>。

つまりフロイトは Witz を三人の人物による心理的なプロセスであり、その過程はこの三人の中において完結されるとしている。ここで「第三の人物」の存在は不可欠である。なぜなら Witz が伝達されることを前提としているならば、Witz の語り手である「自分」の欲求は「第三の人物」なしでは決して満たされることがないからである。自分で思いついた Witz を楽しむことができないのはフロイトが分析する Witz のこの特質による。「伝達」という行為なしには、且つ笑うことによってそれを確認し語り手に伝達の完了の信号を送る聞き手なしには、Witz は完全に成立することができないということである。新聞や雑誌の Witz 欄やインターネットの Witz サイトは、この最後の過程が欠落した不完全な形であり、聞き手の反応が語り手、あるいは Witz の発信者にとって未知のままであることから、Witz としては不安定で不完全な形である。

„Der Witz setzt immer Publikum voraus. Darum kann man den Witz auch nicht bei sich behalten. Für sich allein ist man nicht witzig.“<sup>14</sup>  
(Witz は常に聞き手がいることを前提としている。故に人は Witz を自分の中にしまっておくことができないのだ。自分のためだけに面白く気のきいた話をするのではない。)

ゲーテのこの Witz についての言及は、フロイト同様、伝達されるべき Witz の性質としての側面をとらえていると言えるだろう。自分のためだけにおそらく気の利いた話をするのではない。——単に滑稽なことを発見してそれを笑う場合と違って、Witz の場合はその「おもしろさ」が聞き手へと伝達されなければならない。そしてその伝達される内容は情



報ではなく「おもしろさ」であり「快感」(Lust)である。非常におもしろい Witz を聞かされて心から笑うとき、私たちがそれを聞いて「おもしろかったこと」や「笑ったこと」を覚えていても、よくその具体的な内容を覚えていないのはこれによると思われる。通常、人から聞かされる日常的な話の場合はその内容が特に意識しなくても聞き手の記憶に残り、それが会話で発展する可能性を含んでいるが、Witz の場合はその語り手によって話された Witz が聞き手を笑わせた時点で、既にその伝達の目的が達成されている。「何度 Witz を聞いても覚えていられない」という人が多いのはこのためであり、またひとつの Witz がきっかけとなって同じテーマの Witz がその場で次々に披露されることはあっても、個々の Witz の内容が話題となってそれが会話の中で発展していくことがないという現象も、聞き手が笑った時点で初めて Witz を語るという行為、フロイトの言う Witz 作業 (Witzarbeit) が完了することと関連しているであろう。

フロイトは『機知と無意識の関係』で Witz を夢と対比させて分析し、Witz は夢と多くの特徴を共有するとしている。つまり夢と Witz はともに隠れた類似性や関係の発見、力の節約、つまり圧縮や短縮といった共通した特徴の上に成り立っているが、Witz と夢の異なる点は、夢が他人に何ら伝達すべきものを持たない非社会的な精神的所産である一方、Witz は快感獲得を目指す精神活動すべてのうちでもっとも社会的なものであり、他人の関与によってその心理的プロセスが完成するとしている。夢作業で行われる無意識下で可能な変形も、Witz の場合は第三者の理解の範囲を超えて行われてはいけない<sup>15</sup>。従って Witz は伝達されるということと不可分の存在であるということであるが、フロイトがここで何を「社会的」としているのかは幾分曖昧な観がある。

### 3. 連帯する笑いと Witz

一方、アンリ・ベルクソンはそのエッセイ『笑い』で笑いを明確に社会的な現象とみなし、笑いの母胎である社会との相関性を指摘している。

諸君は汽車中なり共同食卓なりにおいて旅行者達が世間話を語り合っているのは聞かれたことが多分おありであろう。その話は彼らが心が

らそれを笑っているから、必ずや彼らにとってはおかしいものに違いないのだ。諸君ももしかその仲間であったなら同じように笑ったことであろう。けれども諸君はその仲間でなかったから、少しも笑いたい気はしなかったのである… どんなにあげすけなものと思っても、笑いは現実のあるいは仮想の他の笑い手たちとの或る合意の、殆ど共犯とでも言いたいものの、底意をひそめている… 他方、多くの滑稽な効果は一つの国語から他の国語に翻訳することのできないものであり、したがって一つの特殊社会の習俗なり観念なりと相関的なものであるということを人は注視しなかったであろうか… 笑いを理解するためには、笑いの本来の環境たる社会にそれを置いてみる必要がある。殊に、社会的な役目という、笑いの有用な役目を決定しなければならぬ。笑いは必ずや共同生活の或る要求に応じているものに違いない。笑いは必ずや或る社会的意味をもっているものに違いない<sup>16</sup>。(林達夫訳)

ここでベルクソンは笑いが滑稽さを共有する集団、言語や文化、社会、さらにはそれらへの帰属意識と密接に関連したものであることを指摘しているが、これを Witz が語られる際の笑いに転用して理解することも可能であろう。Witz が語られ、笑うという現象が生じるためには、そのグループ、あるいは少なくとも Witz の語り手と聞き手の間にある共通の合意、おかしさを感じる共通コードが存在しなければならない。つまりそれは国境を越えた現代の若者文化の例に見られるようにひとつの世代が共有する感覚でもよいし、逆に伝統を共有する地域の人々の集団で育まれたおかしさのコードでもよい、あるいは趣味の会や職場のグループの構成員の間に存在する共通の感覚でもよい。ベルクソンは「共犯」という表現を用いてさらに強い結びつきを示唆しているが、ここでベルクソンが「殆ど共犯とでもいいたいもの」と表現しているのは「われわれ意識」、グループの連帯感というべきものであろう。

ペーラー (Michael Böhler) は Witz が語られる際に語り手と聞き手の間で相互作用 (Kommunikative Interaktion) が発生し、それはある意味では社会的なグループの形成過程であるとしている。さらにこの語り手と聞き手の間である規範的な価値観についての合意が存在すると認識さ

れ、そこからわれわれ意識 (Wir-Zusammengehörigkeit) が生まれる。むしろこの Witz が語られる際に発生するグループは、その目的に応じて偶発的に発生して、それが定着することはほとんどない、短い時間で消滅するものである。さらにペーラーは、気のあった仲間が定期的に集う飲み会などの場合のように、Witz が語られて笑うことが、すでに存在するグループの規範や行動パターンを確認し、それをさらに強固にする指摘している<sup>17</sup>。つまりペーラーによると、Witz の笑いはグループの中に連帯感を生み出す一方で、グループ内での結束がすでに存在している場合は、Witz を語り笑うことによってそれを確認、定着させることになる。いずれにせよ笑いは集団の中で人と人を結びつける融合的な機能を果たすというのである。

このことは集団が八方ふさがりの絶望的な状況にあるとき、例えば独裁的で自由な言動を制限されたり、あるいは完全に禁じられたりした状況で語られる政治 Witz において顕著である。ナチス時代に当局の目をかくぐって人々の間で密かに伝えられていった Flüsterwitz (囁き Witz) にはヒトラーやゲーリング、ヘスのナチスの指導者達を攻撃的にしたもの、第三帝国の日常、ドイツ式敬礼 (ハイルヒトラーと叫びながら右手を斜め上方に掲げるもの) などをテーマにしたものがあるが、それらの Witz には当時の抑圧された状況の中で、抑圧者や抑圧の現実に対する民衆の声にならない本音がブラックユーモア、Galgenhumor の苦いオペラートを纏って表出している。

Einer trägt die Nase verbunden. Auf die Frage, was ihm denn passiert sei, antwortet er, er habe sich einen Zahn ziehen lassen: „Aber gehn S'. Doch nicht durch die Nasen.“ – „Na, freilich. Glauben S' in diesen Zeiten werd' ich den Mund aufmachen!“<sup>18</sup>

ひとりの男が鼻に包帯を巻いてくくっていた。一体どうしたのかと問われると、歯を抜いたのだという。「そんなバカな。鼻から抜くなんて。」―「もちろん鼻からでさあ。きょうび口なんておちおち開けてられますかい。」

齒を鼻から抜くという行為が、馬鹿げていて、おそらくは非常な肉体的痛みを伴う医学的残虐行為であり、突拍子がなければいほどナチスの非人間的な思想統制に対する痛烈な批判となる。

Ein Bauer geht an einem Kruzifix vorbei und grüßt mit „Grüß Gott!“ Einige SA-Leute, die das hörten, rufen ihm zu: „Das heißt: Heil Hitler!“ – Da sagt der Bauer auf Christus zeigend: „Solange der da oben hängt, gibt es für mich nur: „Grüß Gott.“ Wenn Hitler da hängt, ist es etwas anderes.“<sup>19</sup>

ひとりの農夫がキリスト受難像の前を通りかかり、「グリュース ゴット！」と挨拶をした（神様こんにちはという意味の南ドイツ式の挨拶で、習慣的な挨拶として日常に使われている。筆者注）。それを聞いた突撃隊の兵士達は農夫に向かって叫んだ。「ハイルヒトラーだろ！」すると農夫はキリストを指さしながらこういった。「あのひとがあすこの上につるされてなざる間は、ずっと『神様こんにちは』だよ。ヒトラーがあすこにつるされたら、また話はべつだがよ。」

このWitzのオチは国民全てに強要された「ドイツ式敬礼」をめぐり、ナチスの突撃隊に対する農夫のしたたかな返答である。兵隊に向かって農夫は悠然と、十字架に掛けられているキリストに対する挨拶だからGrüss Gottなので、ヒトラーが同じ場所につるされたら、つまり古代以来罪人を罰する最も一般的かつ明解な方法でヒトラーが処刑されたら突撃隊の兵士の望むとおり、その姿に向かってハイルヒトラーと挨拶すると切り返す。農夫の整然とした論理の前に返す言葉もない兵士の姿が想像できる。ここにはいつの日かヒトラーが正当に罰を受け死刑に処されればいいと言う庶民の願望が潜んでいる。

ナチス時代の厳しい思想統制の元、政治に関したWitzを語ることはいわゆるHeimtückegesetz (Gesetz gegen heimtückische Angriffe auf Staat und Partei und zum Schutz der Parteiuniformen, 国家及び党への悪意ある攻撃、及び党制服保護に関する法)によって、逮捕や、それが

「国防力破壊工作」にあたるとみなされた場合には死刑に処せられたが、このような状況下でなおかつ上に紹介したような Witz を語るということは、聞き手の一人に密告され、逮捕される危険と隣り合わせの行為であった。Witz の語り手は自分が語る Witz の笑いの許容範囲、つまり「おかしさ」を共有できる境界線を見極めながら、さらにこのような体制批判の政治 Witz の内容に対するグループのメンバーの密かな合意を考慮に入れていたはずである。前述のペーラーの主張するように、既に存在していた規範や価値観に対する合意や連帯感が、Witz が語られ笑うことによって確認され、結果としてさらに強固になり定着する。抑圧者であるナチス当局が恐れたのは、民衆の中に連帯感が高まりそれが体制への抵抗の力へと凝縮されていくことであろう。確かに「Witz の攻撃性」や「武器としての Witz」はしばしば論じられるテーマであるが、この場合民衆の連帯感が直接抵抗の力へと繋がっていったとは考えがたい。Witz はプロパガンダやアジテーションとは性格を異にする。抑圧され、出口の見えない社会において Witz のユーモアや笑いはむしろ安全弁的な役割を果たし、恐怖や抵抗の力が凝縮されるのを緩和して、結果としては状況的に体制維持の方向へ作用したのであろう。上に紹介した農夫とキリスト受難像の Witz のように、抑圧者を笑う Witz の中で民衆は決して現実の日常では経験し得ない、支配者に対する優越感を経験することができるのである。その優越感はむろん幻想に過ぎないが、人々はつかの間、自分たちの置かれた閉塞的な状況の中で日常の恐怖から目をそらし、Witz の中に内なる望み（この場合はヒトラーの死、しかもヒトラーが裁かれ死をもって罰せられること）を滑り込ませるのである。

現在私たちが目にする機会のある当時のニュース映像はヒトラーを全面的に支持しその一挙一動に熱狂する市民の姿であり、またそれとは逆に体勢に抵抗を試みた人たち、ナチスの政策の残虐行為の犠牲になった人たちについては現在でも公に私たちの知るところである。しかし現在いわゆる「同調者」というカテゴリーでくくられる当時の庶民の間で、前述したような Witz が危険を冒して確かに伝達されていたのである。Witz という言葉がその意味において本来「理性」や「賢さ」を意味していたことを思い出したい。政治 Witz は、社会の中で民衆が置かれてい

る状況や正式なニュースや統計の記録としては表れない本音を示唆し正確に伝える、政府によって作られた公式記録映像と抵抗地下組織の狭間に位置する。

しかしグループ内の連帯感を生み出すということは、他方ではグループの外にいる他者に対して一種の線引きをするということと表裏一体の関係にあると言ってよいであろう。連帯感や、帰属意識は残念ながら、自分、あるいは自分たちとよそ者を区別することによって、あるいは自分が帰属するところと、そうでないところを区別、選別することによってより明確に意識されるものと思われる。

ザイデルフェルト (Anton. C. Sijderfeld) はユーモアに二面性、逆説的な性格を認め、ユーモアがグループの中で人と人を結びつける融合的な機能を有しながら、他方では現代の若者文化のサブカルチャーに見られるようにグループの境界線を標し、グループ内にいる者と外にいるものを識別、他者に対して扉を閉ざす合言葉のように作用すると説明している。例えばそれは部外者にとってまったく理解不能であったり悪趣味であったりする若者言葉や、独特のしぐさやファッション、音楽や Witz などであり、これらはグループの結束を強める道具であると同時にそのグループのアイデンティティを示すシンボルでもある<sup>20</sup>。

例えばある学校に一人の生徒が転校してくる。その転校生は新しいグループの構成員として受け入れられる為に、つまりクラスメート達に「仲間」として認知されるために、彼らの語る Witz に皆と同じく笑おうとするであろう。たとえそれがいわゆる一般的な理解の「おかしさ」からはかけ離れたナンセンス Witz であろうとも、それが一般的な笑いとは異質のナンセンス Witz であればあるほど、「共に笑う」という行為によってのグループの連帯感は強固になる。

このような状況のもとで際どい嫌悪感を催すようないわゆる「悪趣味」の Witz にさえも私たちが笑うのは、もちろん私たちはその Witz の中に確かに感覚的にある種の滑稽さを認めて笑うのであるが、加えて笑わないことによってそのグループの中で「よそ者」的存在に陥るのを避けようとする意識が働くためであると同時に、笑うことによって Witz の語り手やその場にいる他の人々に対する仲間意識を表現し、ベルクソンの言

う「他の笑い手たちとの或る合意の、殆ど共犯とでも言いたいもの」つまり共通の規範、物事の価値判断の基準を有することを明示するのである。逆に周りが Witz に笑っているときに、笑えない人間は周囲と二重の境界線によって隔てられることとなる。ひとつは「おかしさ」、つまり笑いのコードを共有できないという事実によって笑わない者の内側でひそかに引かれる境界線であり、もうひとつは共に「笑う」という行為を行わないことによって引かれる、笑う者と笑わない者との間にグループの中で引かれる境界線である。連帯意識の創出と境界線引きは往々にして同時進行で起こる表裏一体の出来事である。いわゆる Witz の笑いが一般的な趣向から離れて、際どくなればなるほど、境界線は明確に引かれるのである。

#### 4. まとめ

ヘイワース (Donald Hayworth) によると原始の時代、常に危険に囲まれて生活していた人間は、敵に対する威嚇として本能的に筋肉や神経を緊張させたが、危機が去った時、仲間にそれを知らせるシグナルとして肉体的な緊張を緩和させた。つまりそれが人類の笑いの起源であるとしている<sup>21</sup>。ヘイワースの仮説は笑いをコミュニケーションの手段、媒体として捉えているが、Witz もまた伝達されることを前提として語られるコミュニケーションの手段である。そのコミュニケーションの手段としての Witz の重要な機能の一つにグループの連帯感の創出と定着がある。Witz が語られ、共に笑うことによってその場に「おかしさ」のコードを共有する一つの集団が生まれる。その集団は恒常的に存在するものではないが、そこにはある種の規範や価値判断に関して一定の合意が存在する。このような融合的な機能と並行して行われるのが、いわゆる境界線引きである。Witz を語るという作業はその境界線の位置を注意深く見極め、決定していく作業でもある。人と人を連帯させる Witz の融合的な笑いも、他方では「笑う者」と「笑わない者」、「笑える者」と「笑えない者」の間で境界線を標し、境界線内にできた集団に「われわれ意識」を創出し、外側にいる人間に対して扉を閉ざす。線引きを決定するおかしさのコードは言語、文化、社会、世代やその人の置かれた人生の状況

にも大きく影響を受ける。この意味において Witz を発案し、語り（伝達し）、聞き、笑うという一連の行為は個人と集団のアイデンティティに関連した行為だと言えるだろう。また、一定のテーマで流行し、広く語り伝えられる Witz は、単なる Witz の発信者と受信者の関係を超え、統計やニュース記事には表れてこない庶民の本音を伝達する。この点に関して Witz はメッセージを持った落書きと似ているが、落書きが匿名性を持ち、伝達が一方的かつ一時的であるのに比し、Witz は発信者から受信者にいわゆる face to face で伝えられ、その場ではどちらも積極的な行為の参加者である。今後の Witz 研究には昨今の IT の普及も確かに考慮に入れるべきではあるが、物理的距離が消滅し、情報の受信者が前提として不特定多数となったサイバーメディアの発達した社会で、現在なお口から口へと伝達される Witz が、果たしてアナログ的な伝承の形式を残して、生存していくのかどうか、検証に値する課題の一つと思われる。

本稿は1999年度在外研究の成果として作成されたものである。

#### 注

- 1 Röhrich, Lutz: Der Witz. Stuttgart, 1977, S.1.
- 2 マンタはマンタエイを彷彿とさせる薄く低い車体を持ったフォルクスワーゲンのスポーツタイプの車種で、その車の愛好者はいわゆる軽薄、見栄っ張り、スピード狂など様々な強調かつ戯画化された性格が付与され一連の流行となった。
- 3 Neumann, Siegfried: Schwank und Witz als Medien sozialer Aussage. In: Neumann, Siegfried (Hrsg.): Volksleben und Volkskultur in Vergangenheit und Gegenwart. Bern; Berlin, 1993, S.49.
- 4 Röhrich 1977, S.20-31.
- 5 Schmidt, Andreas: Politische Autorität im Witz. Hamburg, 1988, S.1.
- 6 Grimm' deutsches Wörterbuch 14. Band, Leipzig, 1960, S.862.
- 7 Vgl. Schmidt, 1988, S.3.
- 8 Zahn, Eva (Hrsg.): Facsimile Querschnitt durch die Fliegende Blätter. München, 1966, S.192.
- 9 Grimm' deutsches Wörterbuch 14. Band, Leipzig, 1960, S.862.



- 10 小学館独和大辞典 1985 2561 ページ
- 11 小学館 日本国語大辞典 1981 1022 ページ
- 12 Freud, Sigmund: Der Witz und seine Beziehung zum Unbewussten. Frankfurt am Main, 1988, S.32.
- 13 Freud 1988, S.157.
- 14 Biedermann, Flodoard Freiherr von (Hrsg.): Goethes Gespräche. Leipzig, 1909, S.20.
- 15 Freud 1988, S.192f.
- 16 H. ベルクソン『笑い』林達夫訳 16, 17 ページ.
- 17 Böhler, Michael: Die verlorene Tendenz des Witzes. Zur Soziodynamik des Komischen. In: Deutsche Vierteljahresschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte 55, 1982, S.364. Vgl. Schmidt, 1988, S.42, 43.
- 18 Danimann, Franz: Flüsterwitz und Spottgedichte unterm Hakenkreuz. Wien, 1980, S.17.
- 19 ibid. S.20.
- 20 Zijderfeld, Anton C: Humor und Gesellschaft. Graz Wien Köln, 1976, S.185.
- 21 Hayworth, Donald. The Social Origin and Function of Laughter. In: The Psychological Review 35. 1928, S.367-384. Vgl. Zijderfeld, 1976, S.181, 182.

## Der kommunizierende Witz

Hiroko SATO

Das Wort Witz geht auf den altdeutschen Begriff Wizzi zurück und bedeutete Verstand, Klugheit und Weisheit. Unter dem Einfluss vom französischen esprit und englischen wit entwickelte sich der Begriff weiter und stand für Einbildungskraft, Erfindungsgabe usw. Im 18. Jahrhundert bezeichnete der Witz eine gewisse literarische Gabe oder Ausdrucksfähigkeit. Erst im 19. Jahrhundert kamen komische oder lustige Elemente hinzu. Zu dieser Zeit fand die Wandlung des Sprachfeldes „Witz“ von der Bezeichnung der geistigen Fähigkeit oder Eigenschaft zur lustigen Erzählform statt, wobei die Publikation der

vielen Witzblätter eine große Rolle spielte. Seitdem bedeutete das Wort Witz eine rasche Reaktion mit Worten und ein auf Lachen zielender knapper Erzähltext. In dieser Form ist der Witz heute weit verbreitet und wird vor allem mündlich weitergegeben.

Der Witz ist ein Genre der Erzählung. Die mündliche Mitteilung und Weitergabe sind wichtige Elemente, die den Charakter des Witzes bestimmen. Freud stellt fest, dass der Witz ein psychologischer Vorgang zwischen drei Personen ist, der erst bei der Mitteilung des Witzes bzw. mit dem Lachen über den Witz vollendet werden kann. Somit ist der Drang der mündlichen Weitergabe und das Lachen als Bestätigung von einem gelungenen Witz unabtrennbar. Was dabei vom Erzähler zum Hörer weitergegeben wird, ist nicht der Inhalt eines Witzes, sondern das Vergnügen oder ein Gefühl von Spaß und Heiterkeit. Das ist auch der Grund, warum der Inhalt des Witzes sich selten ins Gedächtnis einprägt.

Warum man den Witz erzählt, ist zwar nicht leicht nachvollziehbar, aber die Spekulationen, was sich ergibt, wenn der Witz erzählt wird, bzw. welche Wirkung der Witz ausübt und daß er Lachen auslöst, werden dabei gute Hinweise auf die Antwort sein.

Eine wichtige Voraussetzung des Witzes ist, dass er mündlich weitergegeben wird. Der Witz ist also ein Mittel im Prozess der Kommunikation mit widersprechenden Funktionen, einer integrierenden und ausgrenzenden Wirkung. Wenn der Witz erzählt wird, entsteht durch Lachen eine Gruppenidentität bzw. Wir-Zusammengehörigkeit; es ist ein Einverständnis mit einer normativen Werthaltung innerhalb der Gruppe. Wenn solche Gefühle aber schon vorhanden sind, werden sie durch das Erzählen gefestigt. Gleichzeitig fungiert das Lachen als Ausgrenzung. Somit kann man sagen, dass im Prozess des Witzerzählens innerhalb der Gruppe ein Wir-Bewusstsein geschaffen wird und dieses Bewusstsein die Tür gegen die außerhalb der Gruppe schließt. Der Code des Komischen hängt von der Kultur, Gesellschaft, Generation und von dem individuellen Zustand ab. Somit ist der ganze Witzvorgang

## 伝達される Witz

mit der Identität des individuellen Menschen und der Gruppe assoziiert.

Außerdem verrät der Witz den Charakter bzw. Gefühle der Menschen, die tief im Bewusstsein stecken. Es ist sicherlich eine interessante Aufgabe zu verfolgen, wie der Witz und dessen Erzählform sich in der Zeit der Cybermedien ändern wird.